東アジア日本語教育・日本文化研究学会報告 196

新羅大学院特別教授　藤井茂利

学会誌とCDが'20年8月に韓国から送られてきて、直ぐ封筒に宛名を書き各会員各位に送った。送料は会誌が310円、CDが140円であった。今後紙による会誌でなくCDによる発表報告に向かう傾向が感じられる。

会誌が各会員に到着したと思われる直ぐ後に会費5,000円の納入がなされ始めた。コロナのため事務局に連絡することがなく、会員は事務局から何らかの連絡を待っていたのであろう。会誌或いはCDでも心待ちにしていたであろう。各封筒には会長のメモ、会費納入の謝辞、近況の知らせを入れている。待っていた連絡物であったであろう。

会員からの会費は主に振替用紙によって納入されている。すると「ゆうちょ銀行」の「貯金事務センター」から、入金額、依頼人の住所、氏名の入った「振込取扱票」と「振替受払通知表」の二枚が送られてくる。これを見ると払込者、金額、取扱年月日、取扱者が確認される大変便利な制度になっている。従来はこれは無料であったが、'20年4月から手数料として一通につき110円が掛かることになった。会員が120名居るとして一万三千二百円の負担となる。今まで無料であったのが一万円となると会の運営もやや酷しくなる。会員は会費の納入振込の時200円程の手数料を徴収されている。「貯金事務センター」は入金通知で更に徴収する。徴収名目は異なるが二重搾取のような氣になる。

会誌が着いたと思われる頃、関東在住の三人の会員が偶然同じ日に会費を払込んだ。「貯金事務センター」からの「振替受払通知表」の「振替受入」の綱目欄に「3」と印刷されていたが一名と同じ手数料は110円であった。

その5日後、福岡で2名、千葉2名、名古屋1名、東京1名の6名の会員が同日振替用紙で入金したが6名ともやはり偶然その日の入金であったが「貯金事務センター」の扱いは110円であった。

その後一ヶ月過ぎ、二ヶ月過ぎる間に時折会費が納入されているが各会員の入金日が異なり「偶然」は起こらない状態であった。一日違いの入金の場合も多く何とかならなかったものかと残念に思う場合もあった。入金日は各会員の都合でなされ自由となっている。が何とかならないものかと考える。

会費の振込の日を決めてみるのも一つの方法かも知れない。例えば各月の10日、20日、30日が土日祝日であれば11日、21日、31日に振込みして頂く。そうすれば「手数料入」の支払は少し節約出来るのではないだろうか、と考えた。

これには「手数料入」制度の説明を会員にして賛同を得なければならないが振込日は飽くまで個人の自由であるとして置かないといけないと思われる。会員への事情の説明には時間がかかる。総会の時が最も都合が良いと思われるが、年に一回しか開かれず何か別の方法を考えなければならないであろう。

'20年の口頭発表の「身代り」的存在となった会誌23輯の主な内容は、

近世の白話小説の左訓
（名古屋大学院）
中国の大学生の観光行動
（日本経済大学）
「多様な日本語」の教育法
（拓殖大学）
ゴールドブラットの翻訳観
（常葉大学）
中国語ベトナム語と日本語
（拓殖大学）
日中大学生のライフ比較
（高知大学）
敬語接尾辞「御」の表記
（早稲田大学院）
「中上健次」論（名古屋大学）
動詞バ動詞ダケの語形
（日本文理大学）

の分野の論が載せられていた。（執筆者名は敢えて省略した。）

若い研究者の今後の活躍を期待すること切なるものがある。

今回の23輯の会誌に日本の古典に関する論が見られなかったが、口頭発表の折には「万葉集」に関する論の発表が二編なされていた。出来ればこの論集に日本古典に関する論文が載るのを期待している。

この学会を作った折の原因は日本文化の中心的存在になる古典の研究を東アジアの立場から考えてみようということであったが、国際学会ということで会員が増えていき古典の研究から離れていく傾向が生じてきているように感じられる。

これが悪いと言っているのではない。新しい研究は古い研究法を越えていかなければならないが、新しいものばかり追うのではなく従来の研究を別の角度から見るのも大切な事である。

学会が出来て25年経つと会員も増えていき諸々様々な研究の発表があるが一度は研究の出発点に立ち帰って見るのも大切であるように思われる。